看護学生の外科看護のイメージに関する研究（第１報）
——臨床実習前のイメージと関連する要因の分析——

麻原きよみ，山崎章恵，室田法子

Study on the nursing students' image of surgery nursing (First report)
—Factor analysis of the image and analyses of factors affecting the image before clinical nursing practice—

Abstract

We investigated two areas; (1) the attitude of nursing students toward their surgical nursing courses before beginning practices, and (2) the relationship between their attitude toward this course and their previous personal experience with surgery.

Sixty-seven nursing students participated in this study. Twenty-three different words and 10 different colors were presented to students. Each student answered how each word or color corresponded to her attitude toward her surgical nursing course using a scale of 1 to 5. We also surveyed the background of each student to: (1) admission to hospital and/or surgery on herself or a family member, (2) duration of attending meetings in a surgical ward, (3) degree of self-confidence in nursing skill, (4) previous grade in surgical nursing course, (5) degree of self-esteem, and (6) lifestyle.

Using factor analysis, we found five factors which were combined in students' attitudes toward their surgical course : (1) fearful and difficult (factor 1); (2) favorite (factor 2); (3) too fast and hard (factor 3); (4) uncomfortable (factor 4); and (5) gentle and human but negative (factor 5). High self-esteem correlated with factor 1 ($P<0.01$). Lifestyle correlated with factor 1 ($P<0.01$) and with factor 3 ($P<0.05$). Factor 4 correlated with a low grade on a previous surgical nursing course ($P<0.01$).

We concluded that our students had negative attitudes toward their surgical nursing courses before practice and that these negative attitude related to previous lifestyle, a low grade in a previous surgical nursing course, or a high degree of self-esteem.

Key Words: 外科看護，イメージ，看護学生，臨床実習，因子分析
surgery nursing, image, nursing student, clinical nursing practice, factor analysis

信州大学医療技術短期大学部看護学科；Kiyomi Asahara, Akie Yamazaki, Noriko Murota, Dept. of Nursing, School. Allied Medical Sciences, Shinshu Univ.

はじめに

外科看護の臨床実習を展開する上で，臨床実習前の外科看護に対するイメージが，臨床実習後では変化していると感じることが多い。看護学生のイメージに関する研究では，子どもや老人等，看護する対象に関する研究[1-5]，母性意識，死や清潔に対するイメージ等，看護学生が持つ価値観に関する研究[6-9]がある。また看護学生の臨床実習前後のイメージの変化を比較した研究では，内田ら[10-11]の子どものイメージに関する調査，深川[12]の新生児，産婦，褥婦のイメージに関する調査，太湯ら[13]の老人に関する調査などがみられるが，いずれも実習後は対象についてのイメージが肯定的に変化したと報告している。一方，川島ら[14]，大谷ら[15]は老人のイメージに関する調査で，実習前後で看護学生のイメージに変化がなかったと報告している。外科看護に対するイメージの研究は，奥宮ら[16]の，看護学生に対して行った，内科看護と外科看護の違いについての調査があるが，両者の違いは，「治療的なもの」とする回答が最も多かったと報告している。しかし，調査を，外科看護に対するイメージや外科看護の臨床実習によるイメージの変化に限定して行った研究はいまだ少ない。

イメージとは，「心の中に思い浮かべる像，心像（公辞苑）」であり，心像とは，「外界の事物が存在した場合に喚起される感覚・知覚体験に類似したものとして体験されること」[17]である。しかし，イメージは，感覚，知覚的性質のみではなく，思考とも密接に関連するとともに，内的実感に基づいたものであり，イメージするその場の条件や，主体の構えとも関連を示すものである[18]。岡野[19]は，「イメージとは，その人の内面の状態が形象化されたものであり，そのイメージを通して人々の実践的態度を知ることができる」と表現している。

そこで，看護学生の臨床実習前後の外科看護に対するイメージを知り，それに関連する要因を検討することにより，看護学生の臨床実習での反応の予測や効果的な実習展開の手がかりにしたいと考えた。その第一段階として，臨床実習前の外科看護に対するイメージを分析し，それに関連する要因の検討を行ったのでその結果につき報告する。

研究方法

1．概念枠組み

外科看護のイメージは臨床実習前後で肯定的に変化すると予測すると共に，臨床実習前後の外科看護に対するイメージに影響すると推測される要因を図1に示した。それには看護学生本人の入院及び手術の経験，看護学生の家族または親しい人の入院及び手術の経験，基礎看護実習を外科病棟で行った日数，看護技術に対する自信，2年次の外科看護学の成績，さらに自分に対して好意的な評価であり，人間が自立的に存在するための基礎となるような健康な自己感，自己確信，安定感[20]とされる自己評価感情（自尊心—Self-Esteem—以下SEと略す）が関連すると推測した。

2．研究対象

本校看護学科3年次生，女子67名である。

3．研究方法

(1) 調査票の作成

外科看護のイメージ尺度は，本調査に先だって，学生に外科看護に対する印象を形容詞で連想させ，その中から出現頻度が多いものを選出し，岩下[21]，長島ら[22]の形容詞対を参考に，5段階評定の23の形容詞対を作成（表

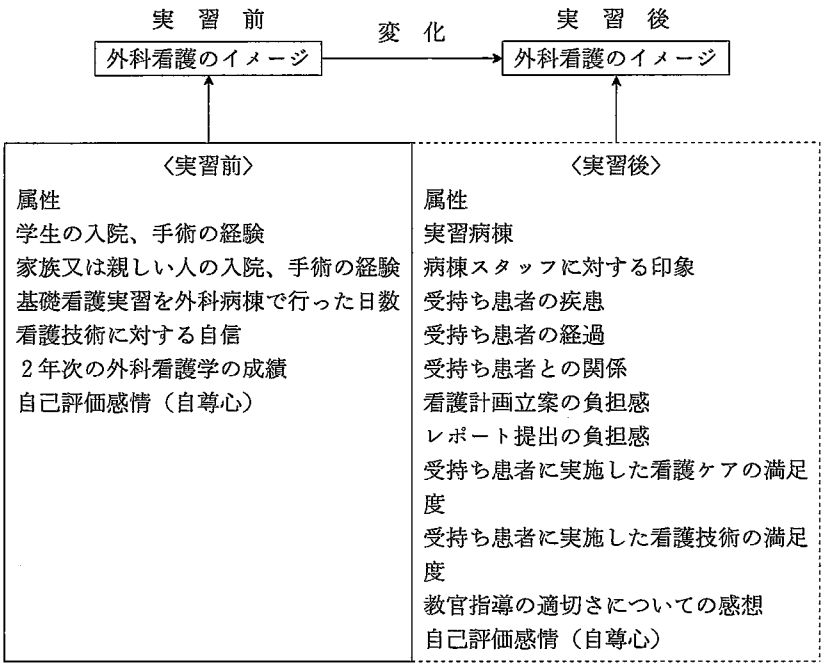

図1　臨床実習前後の外科看護のイメージに影響すると推測される要因

表1　外科看護のイメージの形容詞対

1.	速　い	——— 遅　い
2.	激しい	——— 穏やかな
3.	細かい	——— 大まかな
4.	冷たい	——— 暖かい
5.	厳しい	——— 優しい
6.	苦しい	——— 楽しい
7.	明るい	——— 暗　い
8.	鋭　い	——— 鈍　い
9.	忙しい	——— 暇　な
10.	恐ろしい	——— 平気な
11.	騒がしい	——— 静かな
12.	つらい	——— 楽　な
13.	強　い	——— 弱　い
14.	多　い	——— 少ない
15.	固　い	——— やわらかい
16.	きれい	——— 汚　い
17.	短　い	——— 長　い
18.	悲しい	——— 嬉しい
19.	怖　い	——— 怖くない
20.	難しい	——— 簡単な
21.	好　き	——— きらい
22.	苦痛な	——— 安楽な
23.	よ　い	——— わるい

1）した。また，色彩による連想内容が，その人自身の心の世界や性格などを知る手がかりになることから，外科看護の色のイメージを知るために心理的原色といわれる赤・黄・緑・青の4色に，オレンジ・灰色・黒・白・茶・紫の6色を加え10色を選定した[23]。

外科看護に関連すると推測される要因については，学生本人の入院及び手術の経験の有無，学生の家族または親しい人の入院及び手術の経験の有無，基礎看護実習を外科病棟で行った日数，看護技術に対する自信（有，どちらともいえない，無）を質問項目とした。更に自己評価感情（自尊心）については，Rosenberg, M の SE 尺度を，菅[20]が日本版に修正した10項目からなる尺度を用いた。

また，学生の属性として，父親及び母親の職業，家族の人数，現在の住居（下宿・アパート・マンション，自宅）も質問項目に含めた。

(2)　調査方法

3年次の臨床実習開始3日前に，質問紙調査を行い，その場で回収，また同時に，2年次の外科看護学の成績について情報を収集した。

4．分析方法

各項目の単純集計後，(1)外科看護のイメージ，(2)外科看護のイメージ及び外科看護の色のイメージをまとめた場合の2通りについて，さまざまな事象間の相互関連の強さを分析し，それらの事象の背後に潜む共通の因子（要因）をさぐる統計的手法[24]とされるバリマックス法による因子分析を行った。次いで，イメージに関連する要因を分析するために，外科看護のイメージ及び外科看護の色のイメージをまとめた場合の因子分析の因子得点について，学生の属性及びイメージに関連すると推測される要因をt検定，F検定，ピアソンの積率相関係数を用いて検討した。なお，因子得点とは，「抽出された各因子のもつ傾向を，被験者の個人個人がどの程度強く有しているかを示すもの」[24]である。

結　　果

1．単純集計

(1)　属性

学生の父親及び母親の職業，現在の住居は表2の通りである。母親の職業のうち医療関係に外勤しているのは5名，また現在の住居の多くが自宅以外であり，自宅は8名のみであった。尚，家族の人数は平均4.8人（標準偏差＜以下SDと略す＞1.1）であった。

(2)　イメージに関連すると推測される要因

イメージに関連すると推測される要因のうち，学生本人の入院及び手術の経験の有無，学生の家族または親しい人の入院及び手術の経験の有無，看護技術に対する自信の有無，2年次の外科看護学の成績について表3に示した。学生本人の入院は20名と約3割が経験しており，手術については，9名（13.4%）が経験していた。家族または親しい人の入院は，62名とほとんどの学生が経験しており，手術の経験は54名で，8割が経験していた。看護技術に対する自信が「有」と回答した学生はなく，「どちらともいえない」が18名（26.9%）であり，多くが自信が「無」と回答していた。2年次の外科看護学の成績は，成績の良い方から，ABCの順になっている。

基礎看護実習を外科病棟で行った日数の平均値は，2.4日（SD2.0），SE得点の平均値は，22.9（SD4.4）であった。

(3)　外科看護のイメージ

外科看護のイメージで，高率なものから上位10までの形容詞は表4の通りであり，「忙しい」「速い」「厳しい」「難しい」「激しい」「つらい」「細かい」「鋭い」「怖い」「苦しい」などであった。

(4)　外科看護の色のイメージ

表2　父親及び母親の職業，現在の住居

N＝67

項　目	細　　目	実数(%)
父親の職業	外勤	50(74.6)
	自営業	13(19.4)
	その他	1(1.5)
	無記入	3(4.5)
母親の職業	外勤	32(47.8)
	医療関係に外勤	5(7.5)
	自営	14(20.9)
	無職	14(20.9)
	無記入	2(3.0)
現在の住居	下宿・アパート・マンション	59(88.1)
	自宅	8(11.9)

表3　入院及び手術の経験の有無，看護技術に対する自信の有無，2年次の外科看護学の成績

N＝67

項　　目	細　目	実数(%)
学生の入院の経験	有	20(29.9)
	無	47(70.1)
学生の手術の経験	有	9(13.4)
	無	58(86.6)
家族及び親しい人の入院	有	62(92.5)
	無	5(7.5)
家族及び親しい人の手術	有	54(80.6)
	無	13(19.4)
看護技術に対する自信	有	0(0.0)
	どちらともいえない	18(26.9)
	無	48(71.6)
	無記入	1(1.5)
2年次の外科看護学の成績	A	8(11.9)
	B	35(52.2)
	C	24(35.8)

表5　外科看護の色のイメージで「あてはまる」あるいは「あてはまらない」と思うもので高率な項目

外科看護の色のイメージ	項　目	実数(%)
あてはまると思う	白	31(47.0)
	赤	30(45.5)
	灰色	10(15.2)
	黄色	10(14.9)
あてはまらないと思う	黒	24(36.9)
	紫	24(35.8)
	茶色	21(31.8)
	オレンジ	19(28.4)

外科看護の色のイメージで,「あてはまると思う」に高率であった色は,「白」「赤」「灰色」「黄色」などであり,「あてはまらないと思う」に高率であった色は,「黒」「紫」「茶色」「オレンジ」など（表5）であった。

2．因子分析

表4　外科看護のイメージについて高率な項目

項目	実数(%)
忙しい	59(88.1)
速い	56(83.6)
厳しい	56(83.6)
難しい	46(68.7)
激しい	41(61.2)
つらい	37(55.2)
細かい	30(44.8)
鋭い	30(44.8)
怖い	30(44.8)
苦しい	28(41.8)

(1)　外科看護のイメージ

外科看護のイメージの因子分析の結果について，5因子を表6に示した。因子負荷量±0.30以上のものについては破線で囲んだ。なお，因子負荷量とは,「各変数の背後に共通する因子の係数（重み）であり，一般にこの値（正負にかかわらず）が大きいほど，その因子の効果が大きい」[25]ことを示している。また，寄与率とは,「各因子の全変数への寄与の程度」[25]である。

第1因子は,「恐ろしい」「つらい」「怖い」「苦痛な」「苦しい」という脅威を示す否定的なイメージの項目で負荷量が高かった。また「騒がしい」「難しい」「暗い」という近寄りがたいイメージも表しており，寄与率は13.1%と最も高かった。第2因子は,「簡単な」「鈍い」「弱い」「大まかな」「少ない」「穏やかな」という大ざっぱさを示す項目で負荷量が高かった。第3因子は,「穏やかな」「遅い」「優しい」「暇な」という，時間的経過の遅い，ゆったりしたイメージを示す項目で負荷量が高かった。第4因子は,「よい」「嬉しい」「好き」という肯定的な感情を示す項目で負荷量が高く，また「明るい」「きれい」といった清潔さを示す項目が関係していた。第5因子は,

表6　外科看護のイメージの因子負荷量

変　数　名	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
恐ろしい	0.806	-0.030	0.006	-0.031	-0.137
つらい	0.745	-0.114	-0.147	-0.143	0.153
怖い	0.660	-0.278	-0.070	0.044	0.017
苦痛な	0.626	-0.265	0.008	-0.044	-0.046
苦しい	0.598	-0.032	-0.166	-0.199	-0.027
騒がしい	0.324	-0.084	-0.289	0.259	-0.237
簡単な	-0.400	0.489	0.230	0.091	-0.281
鈍い	-0.238	0.705	0.150	0.014	0.093
弱い	-0.108	0.589	-0.019	-0.253	0.018
大まかな	-0.077	0.565	0.120	0.033	0.096
少ない	-0.080	0.464	-0.020	0.011	-0.088
穏やかな	-0.285	0.442	0.431	0.161	0.266
遅い	-0.042	0.129	0.764	0.045	0.022
優しい	-0.117	0.023	0.644	-0.072	0.027
暇な	-0.125	0.110	0.518	-0.115	-0.016
よい	-0.148	-0.021	-0.079	0.621	-0.112
嬉しい	-0.076	0.084	0.248	0.511	-0.022
明るい	-0.313	0.128	-0.179	0.501	0.225
きれい	0.011	-0.249	0.157	0.455	-0.127
好き	-0.211	-0.116	-0.015	0.441	0.061
やわらかい	-0.023	0.026	0.010	-0.022	0.710
暖かい	-0.068	0.117	0.045	0.084	0.549
長い	0.005	0.016	0.223	-0.298	0.459
因子負荷量2乗和	3.022	2.125	1.856	1.647	1.389
寄与率（%）	13.1	9.2	8.0	7.2	6.0

「やわらかい」「暖かい」「長い」という項目で負荷量が高く，やさしく暖かなイメージを表していた。

(2)　外科看護のイメージ及び色のイメージ

外科看護のイメージ及び色のイメージをまとめた場合の因子分析の結果は，表7の通りである。

第1因子は，「恐ろしい」「つらい」「怖い」「苦痛な」「苦しい」「鋭い」「難しい」「激しい」「細かい」「暗い」といった，外科看護のイメージの第1因子と同様，脅威と近寄りがたい否定的なイメージを表す項目で負荷量が高かった。色では，「灰色」が比較的負荷量が高く，「紫」も負の負荷量が高かった。また因子寄与率は12.9%と5因子中では最も高かった。第2因子は，「嬉しい」「よい」「明るい」「好き」といった，肯定的な感情を示す項目で負荷量が高かった。色では，「オレンジ」「黄色」「赤」「緑」で負荷量が高く，「灰色」「黒」では負に負荷量が高かった。第3因子では，「難しい」「激しい」「速い」「厳しい」「忙しい」「騒がしい」の項目で負荷量が高く，時間的経過の早い，厳しいイメージを表していた。色では，「青」の負荷量が高かった。第4因子は，「鈍い」「弱い」「汚い」「きらい」といった，嫌悪感を示すような否定的な感情を示す

表7　外科看護のイメージと色の項目の因子分析

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
恐ろしい	0.753	-0.106	-0.051	0.064	-0.060
つらい	0.741	-0.143	0.103	0.118	0.096
怖い	0.694	0.025	0.062	-0.169	0.073
苦痛な	0.692	-0.157	-0.061	-0.154	-0.158
苦しい	0.600	-0.201	0.169	0.183	-0.039
鋭い	0.565	-0.086	0.213	-0.477	-0.031
難しい	0.556	-0.003	0.342	-0.098	0.125
激しい	0.498	-0.250	0.415	-0.274	-0.029
細かい	0.386	0.003	0.292	-0.177	-0.104
嬉しい	-0.069	0.558	-0.233	0.105	-0.367
よい	-0.158	0.481	0.075	-0.292	-0.392
明るい	-0.353	0.469	0.128	-0.169	0.005
速い	0.071	-0.057	0.732	-0.053	0.034
厳しい	0.051	-0.105	0.672	-0.006	-0.093
忙しい	0.142	0.086	0.545	-0.092	0.006
騒がしい	0.307	0.148	0.384	-0.010	-0.238
弱い	-0.245	-0.091	-0.095	0.636	0.156
汚い	0.019	-0.085	0.092	0.414	0.380
きらい	0.178	-0.382	-0.003	0.386	0.095
やわらかい	-0.007	0.282	-0.069	-0.051	0.606
長い	-0.065	-0.192	-0.175	0.039	0.537
暖かい	-0.106	0.247	-0.092	-0.016	0.443
オレンジ	-0.085	0.786	-0.059	0.143	0.088
黄色	-0.230	0.689	-0.183	-0.032	-0.074
灰色	0.294	-0.577	-0.121	0.348	-0.065
赤	0.132	0.536	0.214	0.069	0.171
緑	0.208	0.408	0.065	0.190	-0.258
黒	0.238	-0.390	0.266	-0.190	0.127
青	-0.042	0.012	0.305	0.304	-0.264
紫	-0.288	-0.178	0.062	-0.458	0.270
白	-0.019	0.195	-0.127	-0.107	-0.548
茶色	0.184	0.005	0.044	0.194	-0.116
因子負荷量2乗和	4.241	3.481	2.329	2.169	2.055
寄与率(%)	12.9	10.5	7.1	6.6	6.2

項目で負荷量が高かった。色では,「灰色」「青」で負荷量が高く,「紫」は負に負荷量が高かった。第5因子は,「悲しい」「わるい」「汚い」という否定的な項目で負荷量が高い反面,「やわらかい」「長い」「暖かい」といった,やさしく暖かなイメージを示す項目でも負荷量が高かった。色では,「白」が負に負荷量が高かった。

(3)　イメージに関連する要因

外科看護のイメージ及び色のイメージをま

とめた場合の因子分析で，抽出された5因子の因子得点と，学生の属性及びイメージに関連すると推測される要因との関連性につき検討した。

学生の属性のうち，各因子得点と有意差がみられたのは，現在の住居のみであった。住居別因子得点の平均値の比較（t検定）は，表8の通りである。脅威と近寄りがたい否定的なイメージである第1因子は，下宿•アパート•マンションに住んでいる学生より，自宅の学生の方が因子得点の平均値が有意に高かった（P<0.01）。また，時間的経過の早い，厳しいイメージを表す第3因子についても，自宅の学生の方が因子得点の平均値が高かった（P<0.05）。

イメージに関連していると推測される要因では，2年次の外科看護学の成績と，嫌悪感を示すような否定的な感情のイメージである第4因子が有意な関連を示した。2年次の成績別因子得点平均値のF検定の結果は，表9の通りであり，因子得点はA，B，Cの順で高かった。また，AとC（P<0.01）及びBとC（P<0.05）の間に有意差が認められた（表10）。SE得点と因子得点とのピアソンの積率

表10　2年次の成績別第4因子の因子得点の平均値の比較

2年次の成績	標本数	平均値±標準偏差
A	8	−0.600±1.067
B	34	−0.167±0.790
C	20	0.523±0.787

F＝6.43，P＜0.01

［Bonferroniの基準による対比較］

A−C　t＝3.16，df＝59，P＜0.01

B−C　t＝2.88，df＝59，P＜0.05

表8　現在の住居別因子得点の平均値の比較

N＝62※

因　子	下宿・アパート・マンション N＝55	自　宅 N＝7	t値
第1因子	−0.114±0.957	0.899±0.752	2.69**
第2因子	0.055±0.941	−0.430±1.114	1.26
第3因子	−0.096±0.889	0.751±1.117	2.31*
第4因子	−0.017±0.936	0.137±0.873	0.41
第5因子	0.065±0.935	−0.512±0.646	1.58

※色の項目に未記入のあった5名を除いた．＊P<0.05，＊＊P<0.01

表9　2年次の外科看護学の成績別因子得点の平均値の比較

N＝62※

因　子	A N＝8	B N＝34	C N＝20	F値
第1因子	−0.136±1.165	0.035±1.011	−0.004±0.820	0.10
第2因子	−0.001±0.617	−0.079±0.907	0.135±1.121	0.30
第3因子	−0.294±1.242	−0.041±0.823	0.188±0.945	0.81
第4因子	−0.600±1.067	−0.167±0.790	0.523±0.787	6.43**
第5因子	−0.266±1.039	0.063±0.886	−0.000±0.889	0.41

※色の項目に未記入のあった5名を除いた．　＊＊P<0.01

相関係数は，表11の通りで，SE得点と，脅威と近寄りがたい否定的なイメージである第1因子との間に有意な正の相関がみられ，SE得点が高くなるほど第1因子の持つ傾向を強く示していた。一方，学生の属性及びイメージに関連すると推測される要因のうちで，SE得点と有意な関連を示したのは，看護技術に対する自信のみで，看護技術に対する自信が「どちらともいえない」と回答した学生のSE得点の平均値は，25.3（SD4.09）であり，「無」とする回答22.1（SD4.29）より，有意に高かった（P<0.01）。

表11　因子得点とSE得点とのピアソンの積率相関係数

N＝62※

因子	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
SE得点	0.360＊＊	0.018	0.149	−0.081	−0.174

※色の項目に未記入のあった5名を除いた。　＊＊P<0.01

考　　察

1．外科看護のイメージ

臨床実習前の外科看護のイメージを因子分析した結果，第1因子は，寄与率が最も高く，脅威を示す否定的で近寄りがたいイメージが認められた。この因子は，外科看護のイメージと色のイメージをまとめて因子分析を行った場合の，第1因子とほぼ同様で，寄与率も最も高値を示した。これは，手術によって身体が傷つけられるといった恐ろしく，苦痛なイメージを抱いているとともに，学生自身が外科看護をつらく，苦しいものであると予測していることを表しているものと思われる。奥宮ら[16]の報告によれば，看護学生は，内科看護と外科看護の違いを「治療的なもの」と捉えているが，治療的な処置に伴う看護技術に自信のない学生にとっては，外科看護は「恐ろしく」「怖い」ものなのであろう。また，この調査は臨床実習開始3日前に実施したため，臨床実習そのものに対する緊張感が反映している可能性も考えられる。これらのことから，外科看護の臨床実習を前にした学生が，脅威と緊張の高まりを感じて，実習に臨もうとしていることが推測される。外科看護に対するイメージが，臨床実習において消極的な行動を招来すると予測されるので，臨床実習に携わる教育者側が，これらの学生の内面の状態を認識し，臨床実習のオリエンテーションや実習での関わり等でこの点を考慮していくことが必要と思われる。しかし，その一方で，肯定的な感情を示す第4因子や，やさしく，暖かなイメージを表す第5因子もみられ，外科看護に対しては，否定的な側面のみでないことを窺わせた。

2．外科看護のイメージ及び色のイメージ

外科看護のイメージと色のイメージをまとめた場合の因子分析の結果を，色の意味内容[23]との関連から検討してみた。

脅威と近寄りがたい否定的なイメージの第1因子は，色では，「灰色」が関連していたが，灰色は，暗いイメージと捉えられ，第1因子のイメージを表していると言えよう。第1因子と対照的に第2因子は，肯定的な感情を示し，色では，「オレンジ」「黄色」「赤」という，積極さと快活さを示す，暖色系の色の負荷量が高かった。このことから，外科看護に対する肯定的なイメージには，活発で積極的な姿勢が関連しているものと推測できる。また，第2因子は，第1因子に次いで寄与率が高く，この事は否定的なイメージである第1因子，第4因子に対して，肯定的なイメージもある

ことを示している。第3因子の時間的経過の早い，厳しいイメージは，沈静さを象徴する「青」色と関連していたが，この因子は比較的，外科看護を客観的に捉えているものと言えるだろう。第4因子は，嫌悪感を示す，否定的な感情のイメージを表しており，色では，「灰色」と「青」が関連していたが「青」は，沈静を象徴するとともに，消極さを象徴する側面もあり，この第4因子の示すイメージと関連が深いと考えられた。第5因子は，否定的なイメージとやさしく暖かなイメージというアンビバレントな側面を持つ因子であった。色では，「白」が負に負荷量が高かった。単純集計の結果では，外科看護のイメージについて高率な項目は，「忙しい」「速い」「厳しい」「難しい」「激しい」などで，第5因子の「やわらかい」「長い」「暖かい」とは，逆のイメージになっている。また，外科看護に「あてはまる」色のイメージは，「白」が最も高率であり，これも第5因子の「白」が負に負荷量が高いという結果とは相反している。第5因子は，本来外科看護に対して，持つと思われるイメージに反するイメージを示しているが，因子分析により，各項目間の相互関連を分析するなかで，このようなイメージも存在することが示された。

3．外科看護のイメージに関連する要因

外科看護のイメージ及び色のイメージをまとめた場合の因子分析で，抽出された5因子の因子得点と，学生の属性及びイメージに関連すると推測される要因のうち，属性では，現在の住居と第1因子及び第3因子との間に関連がみられた。両因子ともに，下宿•アパート•マンションに住んでいる学生より，自宅の学生の方が因子得点の平均値が高く，外科看護に対して，脅威と近寄りがたい否定的なイメージ（第1因子）と，時間的経過の早い，厳しいイメージ（第3因子）を強く有していた。本研究の対象である学生は，物質的に豊かな時代に育ち，また，核家族化が進行し，一家族当りの子どもの数も少なく，親の関心が集中し，非常に保護された中で生活しているといえるだろう。一方，下宿•アパート•マンションに住んでいる学生は，そのような親元から離れ，一人で自立した生活をすることによって，新規な事態に対する適応力が培われていき，自宅の学生に比べ，外科看護という新規な事態に対して，脅威や厳しさといったイメージがあまり強くないのだろうと考えられる。しかし，今回の調査では，自宅の学生数が少ないため，今後サンプル数を増やして更に検討する必要があろう。

その他の要因では先ず，2年次の外科看護学の成績と第4因子との間に関連がみられた。第4因子は，外科看護に対して，嫌悪感を示すような否定的な感情のイメージであるが，成績が悪いほどこのイメージを強く持つ傾向がみられた。外科看護が嫌いであるから成績が良くなかったのか，逆に成績が良くなかったために，外科看護に対して，嫌悪感を示すような否定的なイメージを持ったのかは明かではないが，2年次の成績と外科看護に対する否定的なイメージとが関連していることが示唆された。従って，2年次の外科看護学の成績が良くなかった学生については，外科看護に対して否定的なイメージを持っている可能性があることを考慮し，臨床実習に関わっていくことが重要であろう。

また，SE得点と第1因子との間にも関連がみられ，SE得点が高くなるほど第1因子を持つ傾向が強く示されていた。自己評価感情（自尊心）は「所属集団から承認されたり，自己の能力に対する自信から生じる」[26]ものとされるが，看護技術に対する自信が「無」

よりも「どちらともいえない」と回答した学生の方がSE得点が有意に高かったという結果がそのことを示唆しているものといえる。また，自己評価感情の指標であるSE得点は，高い方が社会的適応が良好で，情緒的に安定しており，不安傾向が少ないとされているが[27]，今回の結果では，自己評価が高いほど，外科看護に対して脅威や近寄りがたいイメージを持っていることが示された。菅[20]は，自己評価感情とは「人間が自立的に存在するための基盤となるような健康な自己愛，自己確信，安定感であり，自己同一性の中核をなすもの」と定義しているが，自己同一性，即ちidentityとは「自分」が確立することであり，「過去から現在までのあり方，彼が考えている自分と，社会が認め，期待する彼をすべて自己の中に統合し，一貫した自分自身を作り上げること」[28]である。この自分自身，即ち自我に関して更に菅[27]は，一般的な調査研究を通して知る青年期は，物質を含めた環境条件が整い，所属集団から認められ，個人の価値体系が社会のそれと一致しているために適応していたとしても，個人の自我は弱いものであることを示唆している。従って今回の調査の対象である学生も，このような傾向を示すものと仮定すると，今回の調査の結果は，自我が強いとはいえない学生が，外科看護を自我（自分自身）を脅かすものとして捉えていると推測される。また，青年期は，新規な事態に対して，十分対処できる手段を持ち合わせていない[29]ことも脅威の一因となっていると考えられる。一方，この結果は，自己評価が高い学生であっても，外科看護を脅威と感じているという見方もでき，外科看護の臨床実習を前にした学生の，緊張とネガティブな心理状態を認識することの必要性が改めて示されたものといえる。

結　　論

学生の臨床実習での反応の予測や，効果的な実習展開の手がかりとするための第一段階として，臨床実習前の外科看護に対するイメージと，それに関連する要因について検討を試みた。その結果，外科看護のイメージ及び色のイメージをまとめた場合の因子分析では5因子が抽出された。即ち，1．脅威と近寄りがたい否定的なイメージを示す因子，2．肯定的な感情を示す因子，3．時間的経過の早い，厳しいイメージの因子，4．嫌悪感を示すような否定的な感情の因子，5．否定的でかつやさしく暖かいイメージの因子である。また，これらの因子には，学生の現在の住居，2年次の外科看護学の成績，SE得点が関連していることが示唆された。

今後は，臨床実習後の外科看護のイメージを調査し，実習前後のイメージの比較と，実習後のイメージに関連する要因を検討していく予定である。

文　　献

1）星直子：学生の持つ子どもについてのイメージ—3年課程学生の小児看護学履習前を分析して—，第11回日本看護学会集録（看護教育）：155，1980。

2）草場ヒフミ他：看護学生の子ども観—病気の子ども—，第21回日本看護学会集録（看護教育）：103-106，1990。

3）大渕律子，鎌田ケイ子，巻田ふき：看護基礎教育終了時の老人に対するイメージ—老人看護の教授の有無による比較—，第22回日本看護学会集録（看護教育）：87-90，1991。

4）太湯好子：老人に対するイメージとその形成に影響する因子（第二報）—医療系学生の入学時現状分析—，第22回日本看護学会集録（看護教育）：90-92，1991。

5）藤澤里子他：看護学生の老人観の発達に関する研究―老人看護の講義受講後の変化―，第17回日本看護学会集録(看護教育)：214-216，1986。
6）松下美恵，澤田高枝，野口眞弓：看護短大生の母性観に関する調査，第21回日本看護学会集録（看護教育）：107-109，1990。
7）松岡恵他：成熟未婚女性の母性意識に関与する因子―私立看大生へのアンケート調査の多変量解析―，母性衛生，24(3.4)：221-229，1983。
8）菊池登喜子他：死のイメージとその関連要因についての因子分析―看護学生を対象とした質問紙調査による研究―，看護展望，11(6)：594-604，1986。
9）高森スミ他：看護学生の清潔のイメージに関する調査，第19回日本看護学会集録（看護教育）：18-20，1988。
10）内田雅代他：小児看護実習前，実習後の子どものイメージについて，日本看護科学学会誌，8(3)：32-33，1988。
11）内田雅代他：小児看護実習における子どものイメージの変化について，日本看護科学学会誌，11(3)：68-69，1991。
12）深川ゆかり：学生がいだく新生児，産婦，褥婦イメージが看護情報収集へ与える影響，第19回日本看護学会集録（看護教育）：97-100，1988。
13）太湯好子他：看護学生の老人に対する否定的イメージ―老人看護教育についての一考察―，第21回日本看護学会集録（看護教育）：112-115，1990。
14）川島和代，金川克子，真田弘美：老人看護学実習前後における看護学生の老人に対するイメージの変化，第17回日本看護学会集録（看護教育）：94-96，1986。
15）大谷英子，松木光子：看護学生の老人イメージと老人ケアに対する姿勢の変化，第22回日本看護学会集録（看護教育）：83-87，1991。
16）奥宮暁子他：成人内科看護のイメージとPORSに対する学生の反応，第15回日本看護学会集録（看護教育）：203-207，1984。
17）下中弘編：新版心理学事典：424，平凡社，東京，1991。
18）水島恵一，上杉喬編：イメージの基礎心理学，1-6，誠信書房，東京，1983。
19）岡野静二：イメージとは何か，41-125，相川書房，東京，1977。
20）菅佐和子：大学生のSelf-Esteemについての実証的研究(1)，愛知医科大学医学会雑誌，8(1)：77-81，1980。
21）岩下豊彦：オスグットの意味論とSD法，60-63，川島書店，東京，1979。
22）長島貞夫他：自我と適応の関係についての研究(1)―Self-Differential作成の試み―，東京教育大学教育学部紀要，12：84-91，1966。
23）滝本孝雄，藤沢英昭：入門色彩心理学，大日本図書，東京，1988。
24）柳井晴夫，岩坪秀一：複雑さに挑む科学 多変量解析入門，95-100，講談社，東京，1985。
25）高木廣文：ナースのための統計学　データのとり方・生かし方，211-214，医学書院，東京，1989。
26）外林大作他編：心理学辞典，182，誠信書房，東京，1985。
27）菅佐和子：大学生のSelf-Esteemについての実証的研究(2)―Self-Esteemと質問紙法性格検査に対する反応との関連性について―，愛知医科大学医学会雑誌，8(2)：141-147，1980。
28）沢田慶輔編：青年心理学，242，東京大学出版会，東京，1974。
29）藤野武，東正編著：女子学生のための青年心理学，132，川島書店，東京，1977。

受付日：1992年9月30日
受理日：1992年11月20日